

● 高澤良一 第七句集 宿好

● 十月―十二月

蝶せせる薬わなわなとまんじゅさげ

新米の穫れ高「んだな二十俵」

鳶の糞里芋の葉に垂れてける

まんじゅさげ生白の茎によきによきと

手折りみむかやつり草の彼のにほひ

稲雀上げ下げ崎の棚田かな

稲架組んで手刈りの頃の話かな

敬老日ころっと忘れをりにけり

虫のこゑじいんじいんと稲稔る

ランチタイムは秋のシシリア風ピザに

ピザの秋アイダホスペシャル平らげて

十団子に添えて十団子由来状

顔つくる外出の妻に昼の虫

妻と吾と旬の秋刀魚を二等分

昼からの芙蓉曇りとなりにけり

洋梨のおいど優しきものの一つ

ちびっこの駆け足ぱたぱた運動会

老い進む三町内の運動会

物音のよく通る空烏瓜

懸案の一事果たしぬ衣被

女郎蜘蛛縦の糸張る手順見て

白芙蓉咲き加はりし庭の景

ときめきの色に出でたる実むらさき

閑日の昨日今日明日芙蓉の実

今年米うまかり今日に明日に処す

蠮螋は千人斬りの構えなり

青蠮螋生兵法の斧を振る

藁持って青蠮螋を指南せる

長き夜の寝惚先生文集読む
その辺の呼吸呑み込み松手入
隼人瓜弾けば陶の音したり
木犀のこまごま蕾むこと一途
もう一度見てから寝ねん後の月
静物画縞のオブリジェの烏瓜
街騒に木犀零れ初めにけり
いかつくて何處か優しき青くわりん
犬蓼にけふの散歩はここ迄と
雌日芝に降り癖つきぬ野辺のそら
かやつり草背高きは摘み取られけり
市庁舎のユリの木黄葉始まれり
ご町内木犀の香のつなぐ路
虫瘤ももみづる頃となりにけり
紛れ込む蠅螂を外に出し遣りぬ
蝶々に浪花をんなの粹見たり
瀨祭忌発句にもある著作権
七五三辺り走れる櫂の根
女郎蜘蛛楯円函数論知るや
雨衝いて啼き出す鴟の直心
もみづれる高雄ホテルの絨緞も
しぐれ聞きちりめん山椒一つまみ
樹上高山寺には明恵 樹下には女郎蜘蛛
真っ白に明恵の咲かす茸なり
百段の上から落葉搔始む
一頻り萩刈る音か高山寺
ぼこぼこと明恵が頭くわりんの実
しぐれ避け北山杉の見ゆる簷
水引がすいと目に入る高山寺
お茶の実がしんしん冷ゆる高山寺

榮西の茶種育てし露の畑
しぐれては鄙ぶ高雄の柿もみぢ
柘尾のお茶の実に凝る雨雫
秋草を鳥羽絵の兔高掲げ
茶の青実曰く「阿留辺幾夜宇和」とは
茶が咲けば清貧一途の明恵見ゆ
川砂西明寺を敷きて時雨の通る庭
神護寺神護寺のここで一服紅葉茶屋
もみぢ葉は真言陀羅尼 義趣を秘む
神護寺の紅葉明りに一凡夫
日金閣寺が当り嘖りさうな梅擬
背負籠より十歩が程の落葉搔く
金欄の綾なす鯉と金閣と
万両の向うを通る水のこゑ
楓かえるでの穴惑めく走り根よ
赤松に秋の陽赤と鹿苑寺
露けさの金閣見んと一歩寄る
金閣の金を破りて錦鯉
青松に金閣の金ン飛ばしけり
露の金閣屋根は椹と申されき
金閣を呑まんばかりに鯉の口
秋気満つ金閣を出て銀閣へ
龍安寺龍安寺自問自答の鴟のゐて
真昼間の石庭あるく蟻を見ず
佗助の自足の花とおもひみる
禅寺の油土塀に秋闌けて
石庭の謂れ露けき日本語に
碧眼も露の十五の石見据え
方形に秋の日容るる石ノ庭
山茶花のうち崩るるは自刃に似て

ズバリ散る白さざんかでありにけり
さざんかの会心の白龍安寺
つと寄りて轉法輪寺道をしへ
秋蝶仁和寺のあれあれとほる仁王門
色鳥の出入りゆかし御室御所
諸鳥のこゑも染るやもみぢ御所
回廊に回廊を継ぎ萩の風
仁和寺の御室で降りぬ秋袷
秋蝶沿ふ仁和寺の塀長く長く
寶物に加え色鳥蔵す寺
大覚寺大覚寺
さるすべりもみぢ見ながら渡り廊
木斛に秋風の立つ大覚寺
大覚寺畳廊下の秋のこゑ
化野化野念仏寺の露の佛の背のまろみ
石白く粗く化野露佛
化野の犬蓼の辺の欠け佛
化野の露を零せる多聞塀
祇王寺祇王寺はその紫苑の右を行け
祇王寺の日暮紅葉の佛間にる
祇女尊女祇王尊女と紅葉観る
紅葉冷え佛御前のおん膝も
祇王寺の寵ちやうと音してちるもみぢ
滝口寺
横笛をおもひ染めたる色もみぢ
化野嵯峨野の人肌ほどの秋日差
嵯峨竹の春にしてなほつづく徑
朝顔の種も採らずに嵯峨野道
露けさの丹波黒豆「どうどやす」
化野の柿の下ゆき日暮道
落柿舎落柿舎の虫喰いもみぢ葉とす
落柿舎の庭木のそれもこれも柿

紅葉狩落柿舎辺りで日が暮れて
好事家常寂光寺の嵯峨野もみぢといふを見に
兵火天竜寺八度かうむる寺にして紅葉
もみづれる楓のいろは兵火のいろ
ほうほうと馬遠の作画秋翳り
枯山水巖顛頂に露を置き
いわし雲天龍寺船穹駈けて
拝観の最後の一人鴟を聞く
枯山水風化すすむる鴟のこゑ
ためらはず鴟は一刀両断に
「随處なに主と作れば」と鴟の申すなり
鴟洛北聞きて雨の一乗下り松
洛北の雨は大粒柿の実に
冬菜沿ひずんずん下りて一乗寺
もみづれる寺に預かる幽霊図
雨の日の障子明りに幽霊図
一葉よりもみぢ始まる曼珠院
亀脰る白砂と御坊指さしぬ
清閑を楽しむながら柿熟るる
丈山詩仙堂の髯を倣ひて錦鯉
丈山の清貧ゆかし十賊の辺
葉末よりもみぢ始る詩仙堂
雨の柿人間くさくもみづれり
沢蟹おうつかも雨にもみづる凹凸竄
色鳥銀閣寺のこゑを引出す梅擬
つつつと蕪村棕栢図にしぐれ馳せ
露の他省き尽くして銀沙灘
叭叭燕村筆鳥を四方に翔ばせ露襖
哲学の道沿ひ鴨も散歩する
法然院雨に紛るる小鳥ごゑ

心鏡永観堂に写し参らむ照もみぢ
永観堂早紅葉さもみじ雨に色づけり
長き夜の灯を引き込みて先斗町
タクシ恵比寿神社ーで乗りつけ二十日えべつさん
旅人もゑびす顔して宵ゑびす
細路地の四通八達ゑびす講
お薬師東寺の広庭借りて弘法市
九度山の柿も売らるる弘法市
弘法さんの縁日みたらし団子焼く
煤けても不動明王火恋し
朗々東福寺とわたる紅葉の回廊ぞ
等伯智積院の松剛直に秋草図
秋深三十三間堂む観音一体修復中
来来世世見ゆるが如く堂障子
湛慶の作とうんぬん露御坊
宗達養源院の竹描の象身に沁みぬ
若冲忌鯉に遊ばせ貰ひをり
秋霖も京の干菓子もこまごまと
左京区の雨のコスモス高う咲く
鴨を見て京の五条の橋の上
落葉一枚頭に載せてちちんぷい
ふくらんで風除く鶉の不格好
いっぽんの山毛櫨の実二萬猿漁る
人は好きずき楸邨の柿子規の柿
楸邨の柿攻む顔がありありと
銀杏黄葉落つときスイッチバックして
会心の紅葉むらぎも熱くせり
ざっと見ていちいちは見ぬ柿落葉
山茶花も人もいずればガタツと来
おいそれと返事も出来ず帰り花

わだかまりとある日解けて返り花
皆散るは文無しに似て大いてふ
いてふ散る輪舞に吾等瞬きづめ
強いられて大銀杏葉を落としそむ
女藤沢市 長久保植物園郎蜘蛛あはてふためく様見んと
秋の日にカキノ木ダマシといふ樹木
木も痩せて二、三箇しけたくわりんの実
厚物の菊の顛頂に蜘蛛の子来
展示日大船植物園 菊花展に間に合ふ菊の咲かせ方
菊の名も誇らか國華晴舞台
管物の盃咲きの濃むらさき
七本立厚物*顔とは正面のこと菊の盆栽菊こころが顔
菊に石抱かせる術すべに道理あり
菊作りひとりたのしむ胸の内
後列の一際誉れ高き菊
嵯峨菊のかんざし挿して太夫たゆう咲き
伊勢菊の蕾弾けてかむろ禿咲き
七本立だるま控えぬ葭篋張り
どんぐりも首をすくめる寒さかな
木の葉髪そろそろ気になる前立腺
叙勲記事相も変はらず文化の日
首筋の辺りすうすう花八つ手
仏壇の鉦の色もて石路が咲く
「ただいま」は隣のぼうず冬隣
どんぐりの帽子がとれて仕舞ひけり
とっかかり要得ぬ電話文化の日
悪さする虫に先んじくわりん採
くわりん酒の焼酎二升程と踏む
大きくわりんぐるり廻して斑むらなき黄
包丁の齒立たぬくわりん閉口す

懐旧 二句

たたみいわし焙る祖父の手見え冬へ
お使ひはさらし鯨よ爺ちゃん子

天気図の裏日本に雪だるま

冬籠動かざること鰐のごと

職引きて冬籠る図は鰐のうたた寝

立冬に要らぬ雨など降り出して

立冬の床起ち羽織るもの探す

立冬の雨止んでまた降りさうな

立冬の雨にユスリ蚊でんてこ舞

ユスリ蚊に伴奏添えてやらまほし

立冬の我がものとなる新刊書

目につくもの皆がさついで冬は来ぬ

寒くなりけふも饅餡の昼餉かな

茗解く山茶花これは明明しあさつて後日

さざんかの落胆甚だかりしかな

山茶花の花立て直す暇無く

いっこうに何も起らぬ石落の日々

木の葉髪搔いて訴ふ忘れ物

龍淵に潜む好機を逸しけり

飽食の日々を共にす冬蠅と

雲脂飛ばす遊すさびごととして冬机

匂づくりも柿も分別顔をして

酒注げば朗々と鳴る菊脛

シベリアよりどんと吹き込む寒気団

天気図に明日の横這い寒気団

木の葉髪妻居てけふも本を読む

はやり風邪お鉢が廻り来て臥せぬ

着膨れ聞くこむら返りの直し方

一刹那初冬の鳶の影浴びぬ

落葉搔き朝から母の甲斐甲斐し

早々とポインセチアの囲み記事
咲き出せる石路に阿弥陀の頬ゆるめ
願はくば生きのまま召せと新酒着く
蠶螂の斧振りかぶり豪の者
腹見せて蠶螂ひっくり返るとは
其の斧に齒こぼれなかり枯蠶螂
素浪人風の蠶螂振り返る
蠶螂の登攀そこに壁があり
石路蓄む虻の翅音にあやされて
蜘蛛の囲にまんまと懸かる粗忽者
蜘蛛の囲が顔に迷惑千wana
同意なく此処に蜘蛛の巣張るべからず
蜘蛛の囲の顔に懸かるをエイヤツと
獲物へと押っ取り刀の女郎蜘蛛
じたばたをぐるぐる捲きに女郎蜘蛛
腰据えて料理に懸かる女郎蜘蛛
山の日のもう一押しに木守柿
木守の余生といふは透けること
木の葉ひゅうと飛ばして山の風走わる
葉を落とし櫛そびゆること想ふ
観察小屋窓を覗けば鴨ばかり
くにやくにやと嘴広鴨の影曳きて
青鷺の八頭身を水鏡
青鷺の探り歩きの一歩づゝ
セーターの試着好みの木の葉いろ
毛衣の試着鏡よ鏡よと
ひろびろと酢牡蠣味はふ舌があり
旬も旬旬の酢牡蠣しに若くはなし
柚子絞り酢牡蠣ほたほた旬のもの

菊膾のこる余生をどう使ふ
云はるるまゝ膝を崩して菊膾
長芋の短冊切りにひとり酌む
昼月の辺りで穂絮ついと消え
なあるほどこれが冬芽の付き方か
西の市櫻落葉がすつ飛び来
お酉さま神武景氣の世は遠く
おかめ等が夕日呼び込む酉の市
手締めしてそれぞれ熊手又売れた
熊手持つ空似の人や酉の市
熊手売使い込んだる法被着て
灯がついてよりの賑はひ酉の市
くらがりに襟を立てゆく酉の市
お酉さま人出ぬうちの車椅子
起つ風に身震ひ一つ酉の市
電球も黄金光りに酉の市
角店で酒ひっかけて酉の市
文化の日形状記憶シャツ干せり
こめかみの辺りしゃきつと冬立てり
經濟てふからくり空回りして冬へ
ブルゾンの浅きポケット冬が来る
鮮紅のサーモン切身聖夜くる
フルーツパーラーポイントセチアに隣る席
葉牡丹小ぶりにぶん景氣振はずよ
妙案の浮かべることく柚子湯の柚
鼻の真に受けし貌そこにあり
ニュアンスを変へて小藪の笹子鳴く
託ことづかる注連・松・牛蒡忘れまじ
時節柄小ぶりな松を飾りけり
年の瀬の煤ばむ顔を剃られをり

その時はその時と年送り来ぬ
柗の徒ならぬ花の数
着膨れのもたもた脱いで診察室
身勝手を通して貰ふ来る年も
試し刷り龍の賀状をおしゃかにす
天井の海老のいい色年詰る
「その内」はもう目の前に十二月
かさつける五體にじんわり冬至の湯
柚子湯して柚子より軽く浮ける身の
新橋の奥の細道年忘れ
実家から千両貰ふを習ひとす
千両もて玄閼飾り立てにけり
圧力鍋奮闘続く小晦日
数え日の本にも倦めば何とせう
買ひ置きの焼栗つまみ冬籠
大年の空見渡して引っ込みぬ
おでん種曰の大根をたばさみぬ
煙草屋の婆ちやん健在寒いねえ
糞る犬のすまなさうなる貌に冬日
冬服の右ポケットの底の塵
師走妻剥きかけみかん置いて起つ
水栽培針の根降ろすヒヤシンス
煮て焼いて正月料理お忙し
年の湯にしづしづと臍沈めけり
第九歌ふ誰も明眸瞠きて
初詣空がずんずん進みけり
ぴんぴんに空張りにけり枯柏
堂凍みに毘沙門天のひんむく眼
新刊書二三手にして煤籠
裸木の櫂の如菩薩仏菩薩

野暮ったき枇杷の咲き出す頃もよき
鮫鱧の毀れし貌が競^せられけり
冬夕焼会社勤めも大詰めに
小春日に犀の短軀を横たへぬ
出す出さぬ一悶着あり暮の金^{かね}
水仙花泉下にあまた眠るもの
おもちゃ屋のお猿ブンチャカクリスマス
おもちゃ屋の聖樹ちやかぴか景気付け
目につきし佳句反芻して数え日
歳末商戦泥つき長葱もってゆけ
職引きし年も詰りてやれ一年
冬ものの洗濯鼻唄バズデンボ―
ザトペック逝けると冬のチェコ通信
鉄の肺二十世紀を駈け抜けけり
人間機関車全力疾走終ゆ霜旦
ザトペック冬天を馳す蹻音す
冬の蠅発着ふとんの飛行場
青空へ飛び去る冬の蠅の音
めちやくちやな翅音愉しむ冬の蠅
おっとり和大柄にして冬の蠅
冬の蠅頭がだんだん澄んで来ぬ
冬の蠅球^{たま}の躰をぶん廻し
太陽も軌道を外れん大嚏
蠅螂の背筋をぴんと張るときあり
風邪神の有無を云はさず擦り寄れる
「へくしょん」の大盤振る舞ひ致しけり
大舟に乗った気にして風邪の身は
風邪ごゑのうだうだ云うて茶を所望
風邪神に煙草の味を抜かれけり
鼻風邪の昼餉を問へる鼻濁音

鼻風邪のやる気なき身に鞭入るる
鼻風邪を温存するにはあらねども
鼻風邪に愚図る頭を整理せむ
鼻風邪を直す呪文のもしあらば
風邪神のもう四五日と居直りて
鼻風邪の鼻がむずむず直るらし
風邪神のけふ打晴れて御出立
平熱^{懐古}と体温計を振る襦袍
木の葉相搏つ音やがて無くならむ
心臓の薬の後に風邪薬
そそり立つ一冬木見て職引く身
ポーナスのもう出ぬ冬を迎えけり
木枯の夜間働く温水器
とある日の氏子総出の落葉搔
初老とは櫟黄葉を潜るに似て
着膨るゝ人を見上ぐる鯉の目見^{まみ}
隙間風どのみち立て付け直す家
袈^{サン}句^テふ女と相席す^{グジュペリ}
枯るゝ夜を飛行機野郎の本を読む
落葉には熊手ステーキにはフオーク
鳩止めて落葉終る木終らぬ木
早々と葉落とし清々しき櫟
狷介といふ性鴉に染みつきて
味はうて閒石翁の海鼠の句
読みさせば落葉済ませし木々が見え
ポプコーン抛り込むとき小春雲
冬麗の砂零しては初老の手
松蔭の教へしところ冬紅葉
赤松に冬日押し照る豪徳寺
ボロ市や衣の厚きトンカツ屋

ボロ市や枝に引っかけ箆を売る
ボロ市の湯呑み茶碗を爪弾き
ベトナムの竹の鳥籠ボロ市に
ボロ市のビルマヒスイと言ふけれど
ボロ市の包みと包みぶつかれる
ボロ市のやかん頭の骨董屋
ボロ市に選ぶ和服の裾つまみ
ボロ市の戻り足腰くったくた
頭から見下ろされぬる裘
裘女だてらに腕組みす
裸木と紅葉半々山手線
冬日向渡り歩いて病院へ
外来の患者持ち込む咳いろいろ
採血の針見ぬやうに木の葉髪
枯るる身に探りを入るる聴診器
着膨れて財布まさぐる一患者
茜空凍みて東京横浜間
冬木の芽篤くと見て其処離れけり
蹲る鳩を裸木見下ろせり
降り出して梶子の実に韻く雨
くわりん皆もがれし後も黄葉して
選り惑ふ箸にぶつかるおでん種
投函の意を削がれたるこの寒気
一冬木仰ぐ心もささくれて
落葉駆く慌ただしさに立ち止まる
柀の潰えし花の埃じみ
埃じむ眼鏡磨きて冬籠
数え日の眠気もたらず車窓の日
幾たびも使へる聖樹飾り立て
毛衣の品定めする旅車中

冬籠葉袋を身ほとりに
葉を落とし往時のままの瘤櫛
間引かれて残る紅葉をうち仰ぐ
性根据え大榊冬を迎へけり
デザートのみかんに灯影殺到す
はつらつと通りすがりの花八つ手
大銀杏黄葉間引かれ素寒貧
てのひらに移して冬の蟻這はず
丸腰の裸木なれば寄り易し
瘤隆と立寄り易き一冬木
生返事たしなめらるゝ木の葉髪
目つむれば宙に浮く吾日向ぼこ
行き来して句作り算段枯木中
冬菊を前に病ひに勝てるひと
冬至湯に絆創膏も浸りゐて
山茶花をいたぶる霜の手をゆるめず
通勤の鼻を尖らす寒さかな
龍の玉なんぞありそな館とも
八つ手咲き板塀が反る日向路
年金にて妻のやりくり冬珊瑚
修理費てふ伏兵に遭ふ年の暮
臨時出費あれこれ出でくる年の暮
年頭の旅の誘ひの声掛かる
恒例の初旅年金取り崩し
年頭の旅はいつもの顔ぶれで
寛容と厳格同居冬櫛
それぞれの星に名のあり年忘れ